

岩井克人先生の特別講義「貨幣とは何か、資本主義とは何か」

——「経済学史Ⅰ」における外部臨時講師招聘から——

塚 本 恭 章

二〇二五年六月一三日の四時限目（一五時～一六時三〇分）の、私が本学で担当している「経済学史Ⅰ」において、岩井克人先生を外部臨時講師として招聘し、特別講義「貨幣とは何か、資本主義とは何か」が行われた。この短い文章は、そのことを記録するために書かれるものである。

私が岩井先生の東京大学「経済学史」講義を拝聴していたのは、二〇〇四年冬学期のことであり、岩井先生のいわゆる「講義」というものをじかに拝聴するのは、したがって二〇年以上ぶりのこと。昨年二〇二四年九月、岩井先生がエッセイ集『資本主義の中で生きるということ』を筑摩書房から刊行され、その著書をめぐって同年十一月に東京で「対談」させていただいたこともあり、岩井先生との再会はそこからさほど時間の経過はない。とはいえ、本務校の愛知大学でお会いするのは初めてであり、岩井先生ご自身も愛知大学には初めてお越しになられたとのことであった。

一期一会という言葉があるが、今回の岩井先生の「特別講義」は、私自身にとってはまさにそれがぴったりとあてはまる。本学にとって、そして一番には「経済学史Ⅰ」を履修している学生諸君にとっては本当に得難い貴重な経験であったにちがいない（学生には岩井先生の特別講義の内容は奥が深く、十分な理解に到達することができなかったにせよ、こうした講義そのものに触れたという事実こそが大きな意味をもつ。そのことに学生諸君がいずれ気付けることを願いたい）。東京在住の岩井先生は、今回偶然ながら前日一二日に京都で研究会があり、そこで一泊された。そして翌日一三日に上京する途中で名古屋下車し、本学での特別講義が実現することとなった。そのようなお心遣いそのものに私自身は深く感銘を受けるのであり、岩井先生による特別講義は本学へのまさに〈ギフト〉にほかならない。岩井先生とは事前に数回のやり取りをさせていただいており、講義開始一時間ほど前に、岩井先生は教室（一一階の六〇〇人教室L一一〇四）にお越しになられた。その後、最近のご研究や執筆されている論考のお話などについて歓談できたことも私には刺激的であり、なにより楽しかった。当日は四〇〇人近い学生が受講、本学副学長の加納寛先生もご都合がついて参加していただいた。名古屋教務課、情報システム課の職員、広報課の五十嵐浩課長にはご助力いただき深く感謝申し上げます。

*

冒頭三分で、「経済学史Ⅰ」担当教員の私から、岩井先生のプロフィールを簡潔に履修者にむけて紹介した。そのなかではあえて言及しなかったが、岩井先生のプロフィールを紹介できること自体が、私には光栄だった。以下では、当日の授業内で私が話した内容そのものを掲載しておく。

それでは、これから「経済学史Ⅰ」での外部臨時講師招聘による特別講義「貨幣とは何か、資本主義とは何か」を実施したいと思います。外部臨時講師は岩井克人先生です。本日は大変お忙しいところ、愛知大学

にお越しいただき、特別講義をご担当くださり本当にありがとうございます。本音を申し上げます。当初はこういう日にめぐりあえるとは思っておりませんでしたので、本当にとっても感慨深い気持ちであります。この「経済学史Ⅰ」では、二〇二〇年の『岩井克人「欲望の貨幣論」を語る』をテキストとして過去五年間、そして本年も活用させていただいております。

特別講義に先立って、岩井克人先生のプロフィールをご紹介します。岩井先生は長らく東京大学経済学部にて教鞭をとられ、定年退職後はICU国際基督教大学でも教鞭をとられました。岩井先生は半世紀以上におよび、理論経済学、そして経済学を越境した法学や倫理学をめぐって、独自の研究を推進され、語り続けてこられました。現在は、東京大学名誉教授、日本学士院の会員であり、神奈川大学特別招聘教授でもおられます。

国際的な視点から申し上げます、岩井先生は東京大学経済学部を卒業後、マサチューセッツ工科大学にて経済学博士号(Ph.D.)を取得、エール大学助教授、プリンストン大学客員准教授、ペンシルバニア大学客員教授を歴任、ベオグラード大学の名誉博士号を授与されてもおります。近年について申し上げます、二〇一六年に文化功労者に選出され、二〇二三年には文化勲章を受章されました。

岩井先生はこれまでに多くのご著書を出版されております。一九八一年の *Disequilibrium Dynamics* (不均衡動学) で日経・経済図書文化賞の特賞を受賞、本日の講義テーマに関連していますが、一九九三年の『貨幣論』でサントリー学芸賞を受賞、二〇〇三年の『会社はこれからどうなるのか』では小林秀雄賞を受賞されております。不均衡動学、貨幣論、資本主義論、会社・法人論、信任論についてのご研究は、岩井先生における現在の研究テーマでもあり続けています。学問的自伝である二〇一五年の『経済学の宇宙』は本当に素晴らしい作品です。昨年二〇二四年にはエッセイ集の集大成である『資本主義の中で生きるとい

うこと』を出版されました。

最後になりますが、岩井先生が日本語で初めて出版され、最も愛着のある本である『ヴェニスの人々の資本論』は一九八五年に出版されています。したがって二〇二五年の本日の特別講義は、そこからちょうど「四〇年」という歳月を経て実現されることになり、担当者としてはこの不思議なめぐりあいを今強く感じているところです。講義時間は八〇分となります。それでは岩井先生、どうぞ宜しくお願い申し上げます。

*

岩井先生が準備されたパワーポイントの講義資料はじつに六〇枚以上のスライドがあり、残念ではあったが、時間内ですべてを講義することは叶わなかった。具体的にいえば、特別講義の内容は岩井「貨幣論」についてまでであり、その後の岩井「資本主義論」、そして「貨幣と資本主義との関係」についての内容には言及できる時間が残されていなかった。しかしながら、全体のスライドの八割以上は講義され、残りの簡



講義をされる岩井克人先生
(撮影：五十嵐浩広報課長)

所は、特別講義をふまえて履修学生自身で補うことができるだろう。むしろそのようにポジティブに捉え直したほうがよい。前述しておいたように、私の「経済学史Ⅰ」では、『岩井克人「欲望の貨幣論」を語る』を過去五年間テキストとして活用してきており、今年も引き続きそうしている。さらに二〇二五年四月に刊行の拙著『いまこそ「経済学の冒険」を語る』も同時にテキスト指定し、すでに五月中に「課題」実施もしている。

課題の範囲には、『岩井克人「欲望の貨幣論」を語る』（以下は『欲望の貨幣論』）への私の論考や岩井先生との対談もふくまれている。したがって「課題」をこなした学生には、すでに岩井理論と岩井「経済学史」についての一定以上の予備知識があるとみてよいはずだからだ。

岩井先生の特別講義の内容はきわめて多岐に及んでおり、ここでそれらのすべてを紹介することはできない。そこで、私自身があらためて学び直し、今後も思考し続けていきたい論点のみに触れておきたい。

岩井先生は、「貨幣Ⅱおカネ」というものをもつ（形而上学的な）「不思議さ」を強調され、その「不思議さ」を感じること自体が難しいといわれた。貨幣Ⅱおカネを日常的に使用しているわれわれはその「不思議さ」に気付くことなく、それが人々のあいだで流通・循環することをいわば当然視している。だがしかし、なぜ「貨幣」は「価値」をもつのか、なぜ「貨幣」は「貨幣」として機能しているのかという問いに「正しく答える」ことはけっして簡単ではない。周知のように、既存の貨幣学説にはこの問いに答えようとした「貨幣商品説」と「貨幣法制（法定）説」の二つが存在していた。岩井先生は貨幣についてのこの二つの学説の内容を丁寧に説明され、そのいずれもが「誤り」であることを論証されていた。それについての詳細は割愛するが、貨幣商品説と貨幣法定説がともに「誤り」であるならば、先の問いにはどう答えることができるだろうか。岩井先生の貨幣論、それは貨幣が貨幣としての価値をもつのは、貨幣を「すべての人が貨幣として受け取るからである」という貨幣の自己循環論法に帰結することとなる。貨幣の「自己循環論法」理論がもつきわめ



て重要なインプリケーションとは何か。金銀の素材的な性質や人間の欲望、あるいは国家の権力や命令などの「実体」にこそ貨幣の「本質」を還元しようとしてきた貨幣商品説や貨幣法定説とは根源的に異なり、「貨幣とは貨幣であるから貨幣である」という自己循環論法としての岩井貨幣論は、まさに貨幣の「本質」の「虚無性（無根拠性）」をこそ説くものにほかならないということである（ただし、貨幣の「価値」はたんなる「幻想」ではなく、他のすべての人々が一万円を一万円の「価値」をもつとみなしていれば、みずからの「主観」からは独立して一万円の価値をもつ。それゆえ岩井先生は、その実体性は「社会的」であると主張されている）。

多くの人々は「無根拠性」といういちじるしい〈恐怖〉から逃れるために、貨幣の「本質」を実体還元主義的な思考様式にもとづいて答えようとしてきたが、それは貨幣についての正しい理解を妨げる障害となってきたのである。岩井先生が到達された貨幣の自己循環論法から「貨幣」とそれにもとづく貨幣経済としての「資本主義」というものをあらためて捉え直してみると、そこには不可避免的で根源的な〈不安定性〉^①が内在していることがはつきりと浮かび上がってくる。貨幣とはこの世に存

在するもつとも純粹な「投機」であり、さらに人間に「自由」を与える社会的実在であることによって、資本主義社会は本質的な「不安定性」からけつして免れえない、まさに（二律背反）を抱え込んだ存在なのである。岩井先生は特別講義でこういわれた。「重要なことは、個人の『自由』の条件こそがまさに社会にとつての『危機』の条件ともなっているのです」と。『欲望の貨幣論』の冒頭や『経済学の宇宙』の最後でも、つとに強調されている認識であり、そのことは同時に、人間の「自由」を守るためには（自由放任主義）からの決別こそが決定的に必要であることを表明している。

岩井先生が「貨幣」とともに重要視されている「言語」と「法」という、社会的実在としての「社会的媒介」の存在によって人間社会は成立し、存続することができるのである。²²「言語・法・貨幣」によって人間と人間社会は「自由」を手に入れることができる反面、先に指摘されたように、その「自由」こそが人間社会に「危機」をもたらす真因でもある。だからこそ、その「危機」は自由放任主義ではけつして解決しえない。岩井先生によれば、むしろ「自由放任主義は資本主義破壊への道」をもたらすのである。特別講義の資料には次のように記述されている。純粹投機である貨幣にもとづく貨幣経済としての資本主義経済は、自由放任にすれば、「貨幣のバブル（恐慌）」や「貨幣のパニック（ハイパーインフレ）」を引き起こす可能性を常にもっており、したがって、貨幣経済（資本主義）の安定性には自己利益ではなく、「公共の利益」（景気対策など）に奉仕する「中央銀行」や「政府」が絶対に不可欠であると。

岩井先生によるこうした主張の理論的含意は、主流派（新古典派）経済学批判の出発点をなす（不均衡動学）理論から必然的に導かれるものにほかならず、いうまでもなく（貨幣論）研究の成果も明確に組み込まれている。『欲望の貨幣論』には、次のような岩井先生の総括的見解があることも、ここであらためて指摘しておきたい。「自由放任主義者も社会主義者も、ともに貨幣に関して十分に思考しなかったのです」（二四頁）。

*

岩井先生の資本主義論、そして岩井「貨幣論」と岩井「資本主義論」の有機的関係については講義される時間がなかったが、「差異から利潤を生み出す」という「利潤の差異原理（資本主義の基本原理）」が岩井資本主義論のコアにある。

ここでもいわゆる「差異」とは実体的根拠がなく、革新と模倣を繰り返す資本主義経済において、それはいつでも消え去る運命にあるという。貨幣の「本質」から実体を取り除いたように、「利潤」を永続的に創出していく資本主義の「本質」（をなす「利潤」）からも同様に実体を取り除く。岩井先生によれば、貨幣も資本主義も「純粹に形式的な論理」によって動いている。資本主義における「利潤」は、収入から費用を「引き算」して得られるのであり、この「引き算」という最も単純な算術のみによって動いているのが資本主義にはかならない。だからこそ、資本主義という仕組みは普遍化し、そしてグローバル化する必然性をもっている。

現代のグローバル化した資本主義が引き起こす多面的な問題群に対峙していくためには、上述されたように、貨幣にせよ資本主義にせよ、それらが「純粹に形式的な論理」で動いている以上、なんらかの実体的な根拠にもとづく代替案からは限定的な効果しか得られえない。マイケル・サンデルの「コミュニティアニズム」、岩井先生の師である故宇沢弘文の「社会的共通資本」、斎藤幸平の「脱成長コミュニティ」、西部忠らの「コミュニティ通貨」などとはつきり一線を画するのが岩井先生の思考であり、そのことは、究極的には「貨幣とは何か、資本主義とは何か」という今回の特別講義のテーマそれ自体についての岩井理論の独自性からおのずと生じうる論理的帰結といえるだろう。貨幣論と資本主義論に先立って理論的に構築された〈不均衡動学〉理論、貨幣論と資本主義論を経て構築された〈会社・法人〉論と〈信任関係〉論。岩井先生の理論経済学の研究とそれを越境していく研究領域の拡がりや深さと厚みは、雄大な山脈を連想させるものであり、「経済学史

Ⅰ」の履修学生はその一端を直接の講義をつうじて垣間見ることができた。本当に幸せなことだと私は思う。

*

特別講義のいわば「まとめ」として、私は最後に次のように話そうと予定していた（ただ実際には、時間的都合で割愛することとなった）。

本日の岩井先生の特別講義を拝聴させていただき、資本主義と貨幣について考え直すことはまさに「経済学史」を考え直すことであるとあらためて強く思いました。岩井先生が導かれた「貨幣の自己循環論法」と「利潤の差異原理」という、貨幣と資本主義についてのものとも基本的な原理ないしは真理を正しく理解しなければ、資本主義の理論（理念）も、現在の資本主義が直面する危機の真因も、そしてそこからの変革の道筋も誤謬に陥ってしまいます。したがって「経済学史」のなかで、貨幣と資本主義についてなにがどのように語られてきたのか、逆にいえば、なにが語られずに見失われてきたのか。このことを構造的に語り直されたのが、本日の岩井先生の特別講義の基本精神なのではないかと思いました（以上が「まとめ」）。

岩井先生のこの基本精神を明確に受け継ぎながら学問の道を歩



み続けたい。二〇一五年に刊行された、日本経済新聞出版社の『経済学の宇宙』から一〇年を経て五〇代に入った私にとって、今回の特別講義はあらためての決意を固める素晴らしい機会となった。特別講義が盛大な拍手をもって終了したことはいうまでもない。今は無事に終了できたことに安堵し、それを喜びとしたい。そして愛知大学にお越しくださった岩井先生にもう一度、心より感謝申しあげたい。本当にありがとうございます。

注

(1) 岩井先生の『貨幣論』（筑摩書房、一九九三年）には、たとえば次のような記述がある。「貨幣共同体という共同体には、貨幣を貨幣として使っているということ以外にはなんの実体性もあるわけではない。それはただ、みずからが未来永劫にわたって存在しつづけるという宙ぶり的な期待によってのみ支えられているのである」（二〇三頁）。もう一か所、『資本主義を語る』（講談社、一九九四年）のなかからも引用しておきたい。「貨幣の価値は何がささえているのかといったら、商品世界がつづいていくという信頼がささえている。商品世界がつづいているという信頼は何がささえているかというと、貨幣が価値をもって商品交換を媒介しているという事実がささえている。この宙ぶり構造が崩れると、これはもう社会の完全なる崩壊です。貨幣そのものの価値が崩れ、同時に人間と人間の関係が崩れてしまう」（一七四頁）。

(2) このことの意味をより正確に理解するために、『経済学の宇宙』（日本経済新聞出版社、二〇一五年）における岩井先生自身による説明を記しておこう。「言語と法と貨幣とは、したがって、まさに『人間社会』それ自体を成立させる媒介であるという、本質的な意味で『社会的』であるのです。いや、人間社会に支えられながら、同時に人間社会を支える実在という二重の意味で、社会的な実在であるのです」（四六九―四七〇頁）。

【参考文献】

岩井克人『ヴェニスの商人の資本論』筑摩書房、一九八五年。

岩井克人『貨幣論』筑摩書房、一九九三年。

岩井克人『資本主義を語る』講談社、一九九四年。

岩井克人（聞き手＝前田裕之）『経済学の宇宙』日本経済新聞出版社、二〇一五年。

岩井克人＋丸山俊一＋NHK「欲望の資本主義」制作班『岩井克人「欲望

の貨幣論」を語る』東洋経済新報社、二〇二〇年。

岩井克人『資本主義の中で生きるということ』筑摩書房、二〇二四年。

塚本恭章『いまこそ「経済学の冒険」を語る―本を読み、文章を書く』読書人、二〇二五年。